

感謝の夏

秋田県大仙市立大曲中学校

三年 杉本海音

朝、六時四十分。これから一時間以上かけて秋田県立武道館へ向かう。私は、第五十八回全県児童生徒席書大会に出場するのだ。三万四千人あまりの出品の中から選ばれた、およそ三百十六人だけが出場できる大会だ。小学生のときから毎年のように来ている大会だったが、それはきつと、自分一人だけの力では実現できなかったことなのではないだろうか。夏の朝日を浴びながら走る祖父の車の中で、少し、習字を始めてからのことをふり返ってみる。

「ほら、海音。これすこいでしょ。あなたのおばさんが四年生のときに書いたんだよ。」

古いアルバムをめくりながら、祖母が私に一枚の写真を見せた。そのとき私はまだ小学一年生だったが、それがすばらしい作品だということにはわかった。きれいに整っていて、とても力強い文字だった。ぽーっと見つめていると、祖母が、

「海音も習字やってみる？」

「うん、やってみる。」

自分は何も習い事をしていないし、四年生になるころには私もこんな字が書けるようになるのかなあと、軽い気持ちで返事をした。

最初の頃は楽しくやっていた。児童クラブに入っていたので、習字の日だけは友達と歩いて帰れるからということもあったかもしれない。しかし、大変なのは夏休みだった。夏休みに入ると、秋田書道展全国展などの大会に向けての練習が始まり、長い休みにもかわらぬ遊べる時間は少なくなつた。一日三時間の練習が何日も続いたこともあったし、疲れてしまえば勉強にも身が入らない。学校の課題がどんどんたまっていって、もう習字なんてやめてしまいたいと思つた。なんとなく始めたものだからなんとなく終わるものだと思つていたが、そうではなかつた。家族、習字の先生、学校の先生などたくさんの人に期待や応援をされて、結局は嫌と言いながらもやめずに続け、自分なりにがんばって結果を残してきた。

中学生になると新たに行書が始まつた。行書のほうが好きかもしれないと思うと同時に、ここまで習字を続けてきたのだということに改めて気付かされた。そして中二の冬、ふと、「自分はまわりからこんなに期待や応援をされているのに、こんな中途半端な気持ちでいいのかな？」このままでは期待を裏切ってしまうのではないかと考えた。これまでもだつてたくさん練習して良い結果を残してきたが、しかし私には感謝の気持ちに欠けていた。この冬休み、ちよつとがんばってみよう。これまでの練習で基本はしつかりと身に付いているし、気持ちを込めて書けば、もっと温かみや優しさ、力強さのある文字が書けるのではないかと思つた。課題は「初戦突破」。八つ切りの紙に行書で書く。練習には積極的に取り組み、一文字目の一画目から丁寧に、繋がりを意識して書いた。

この課題で三つの大会に出場し、そのすべてで良い成績を取ることができた。特に、秋田県新年書

初め席書大会では推薦賞をいただき、表彰式での緊張と喜びは今でも鮮明に覚えている。そして、こういうときにいつも最も喜んでくれるのは、小一のと きから今まで習字の送り迎えをしてきてくれた祖父だ。祖父は、私がどんな賞を取ったときでもおおげさといつていいほどに喜んでくれる。習字を続けてこられたのは、この祖父の力が大きかつたと思う。

今年私は受験生となつた。高校について調べ始めて、そして見つけたのが「書道部」だ。書道大会の会場で何度か書道パフォーマンスを見たことがあり、その時の、掛け声や腕や体を大きく動かして書く、見せる書道の迫力に、見る度に圧倒させられていた。自分もやってみたいという気持ちが少しずつ強くなつていき、目指す高校に合格したら絶対書道部に入つてたくさん活躍したいと思つた。そのためには、勉強も習字もたくさん小さな積み重ねが大切だと思ふ。小さくても少しずつ積み重ねていけば、それは大きな力となる。そして今日、私はまた一つ、小さな何かを積み重ねようとしている。

祖父の車を降りると、たくさんの人に紛れて会場へ向かつた。墨汁のにおいが広がるこの大きな会場で今年の夏も自分を成長させることができる喜びを、私は強く噛み締めた。結果が出たとき、私はどんな表情をするのだろう。笑顔になれるように書こう。そして感謝の伝わる文字になるように。筆を手に持ち、墨をつける。

私にとって中学校最後となるこの大会。

ピーツという合図とともに、私の夏が始まつた。

作文を書くに当たって

習字を8年間続けてきて自分を成長させてくれたことについて書きました。さらに成長するために、私にはまだまだ努力と感謝が必要だと思ひます。この作文が、読んでくれた人にとって、「感謝の気持ちを持つ大切さ」や「常に、自分を支え応援してくれる人がいる」ということを考えるきっかけになればいいです。